

月刊 インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 105 年)



アジャンタ絵画コンクール 受賞作品

(詳細はP. 22 をご覧下さい。)

目次

1. 荒松雄先生 追悼文	P. 3
2. 『インド駐在を終えて』 寄稿	P. 5
3. JICA だより 第3回	P. 11
4. インド・ニュース(11月6日~12月6日)	P. 12
5. イベント情報	P. 22
6. 掲示板	P. 23

1. 荒松雄先生 追悼文

今は亡き荒松雄先生を偲んで、追悼のことば



写真 講演される故荒松雄先生 <会報 1997年5月号表紙より>

当協会顧問であり、中世インド史研究家として著名な荒松雄先生が11月8日9時20分ご他界されました。11月13日11時から東京・池上本門寺にて、ご親族、ご友人、そして弔辞を読まれた辛島昇氏、柳沢遥氏ら多くの教え子や門弟たち、インド関係者らが参列される中、「荒松雄博士の告別式」がしめやかに行われました。喪主は60年間苦楽を共にされた芳子夫人がつとめられました。先生は浅草生まれ、当日は先生のカラットした生粋の江戸っ子の気性を思わせる久方ぶりの秋晴れとなりました。

先生は、1944年9月東京帝国大学文学部史学科を卒業された後、その年の12月に太平洋戦争で応召され主に朝鮮半島で従軍、終戦時は陸軍歩兵少尉で、濟州島から1945年12月に復員されました。翌年4月には東京大学大学院に入学されました。1947年10月から東京大学東洋文化研究所助手、52年6月から56年3月までインドへ出張、54年4月にはバナラシ・ヒンドゥー大学文学部より修士号を受けられました。

帰国後、東京大学東洋文化研究所、東京大学文学部専任講師、助教授を経て、1967年東京大学東洋文化研究所教授に就任、1972年4月から73年3月まで同研究所所長をつとめられました。

1982年3月定年で東京大学教授を退官されるまで、1973年2月に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員に就任され、1980年には3ヶ月間オーストラリア国立大学客員教授として招かれ、通訳なしで講義をされました。

生前、先生には数多くの著作がありますが、特に自らデリー近郊の遺跡を中心に実地調査をされ、纏められた労作『インド史におけるイスラム聖廟～宗教権威と支配権力』（1977年9月 東京大学出版会）に対しては1978年6月に日本学士院賞が与えられました。

インド関係の主な著書だけ挙げても、

『現代インドの社会と政治～その歴史的省察』（1958年 弘文堂刊）

『三人のインド人～ガンジー、ネール、アンベドカル』（1972年 柏樹社）

『ヒンドゥー教とイスラム教～南アジア史における宗教と社会』（1977年 岩波新書）

『インドとまじわる』（1982年 未来社）

『わが内なるインド』（1986年 岩波書店）

『中世インドの権力と宗教～ムスリム遺跡は物語る』（1989年 岩波書店）

『青春、さもなくば森～インド、ユーラシアそして私』(1991年 未来社)

『多重都市デリー～民族、宗教と政治権力』(1993年 中央公論社)

『インド・イスラム遺蹟研究～中世デリーの「壁モスク」群』(1997年 未来社)

『中世インドのイスラム遺蹟～探査の記録』(2003年 岩波書店)

『インドの「奴隷王朝」～中世イスラム王権の成立』(2006年 未来社)

『インドと非インド～アジア史における民族・宗教と政治』(2006年 未来社)

などがあります。この他にも共著や編著、論文など、枚挙に遑がありません。

又先生は、1975年ペンネーム新谷識『死は誰のもの』(『殺人願望症候群』1992年中央公論社刊に納められています)で、第14回のオール讀物推理小説新人賞を受賞されました。その後も『インド宮廷秘宝殺人事件』(1995年 双葉社)ほか数々の歴史推理小説を執筆しておられます。

東京大学を退官後、1994年まで津田塾大学、恵泉女学園大学で教鞭をとっておいででした。

先生は、大学・学園内にとどまらず、広くインド文化紹介の為、日印協会理事(1980年4月～2007年6月)として日印文化交流の進め方についてご助言を賜り、インド文化講演会の講師として何度かご講演頂きました。

先生との一番思い出深い出来事は、1989年6月23日～25日2泊3日、神奈川県の大山山麓「玉川館」という温泉宿に荒先生をお招きして、協会と「インドの魅力を発掘する会」主催の夏季合宿インド・セミナーを行った時の事でした。24日の夜は先生のお話を聞く予定でしたが、夜食の歓談の際にテレビで美空ひばり死去のニュースが流れるや、先生から「僕はひばりの大ファンでね」と言う話から、めったに口にされないお酒を召していたこともあって、夜遅くまでインドの話そっちのけでひばりの話で終始した記憶があります。その時先生がひばりの歌を披露されたかどうか、はっきりした記憶がありませんが、荒先生のお人柄を垣間見て、ますます先生が好きになったのもこの時からでした。将来、機会があれば、カラオケで美空ひばりの歌を皆で歌い合って、荒先生をお偲びしたいと思っています。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

〈鹿子木謙吉理事 記〉

2. 『インド駐在を終えて』 前丸紅インド会社社長 津田直樹氏より寄稿

本年4月に5年の任期を終えてインドから帰国された協会会員の津田氏より寄稿頂きました。11月号に引き続き後編をご紹介致します。



写真 デリーのレストラン・ブカラにて
奥様とともに

<11月号 内容紹介>

私は2003年4月から2008年4月までの満5年間に丸紅インド会社の社長として、発展し続けるインドを、皮膚感覚で体験する貴重な機会を得た。インドという国とインド人との上手な付き合い方について、これからインドに駐在しようとしている人たちやインドに会社を設立しようとしている方々の参考になればと思い、まとめてみた。読者諸兄姉からの忌憚のないご批判を頂戴できれば幸いである。

1. 度の合ったメガネで見るな！(インドビジネスの心得)
2. いいかげんだが悪気はない
3. インドは好きになる人と嫌いになる人にはっきりと分かれるが、あなたの場合は？
4. できるだけ高いカーストの現地雇員を採用すべき
5. カースト制度はなくなるならない
6. インドでは長幼の序を重んじる
7. デリーゴルフクラブはカースト制度の縮図である
8. 英語が通じるので通訳に牛耳られることがない
9. インドにはまだ女性差別が残っている
10. 核家族化が新しいビジネスチャンスだ
11. 女性のファッションも欧米化が進んできた
12. 対日感情はきわめて良好

13. インドが日本に求めているのは「高い技術力」

インドが日本に求めているのは日本の「高い技術力」である。産業のあらゆる分野に於いて、このことは極めて重要である。市場も資金も労働力も十分にあるインドが日本に求めるモノは「高い技術力」しかない。高い技術力がないと、この国への進出そのものに意味がなくなるといっても過言ではない。逆にいえば、インド側が望む日本企業の進出方法は「技術提携」である。したがっていろいろなリスクがあるので、最初は「技術提携」からインド進出をスタートします、などというのはインド企業の思うつぼということになる。その程度の中途半端な方針であれば、インドへの進出そのものを見直した方がよい。

海外に駐在していると日々痛感することであるが、日本の国力とは技術力と同じというように思えてくる。今後も国際的な発言力を維持・拡大していくためには、他国ではまねのできない「技術力」を磨いていくことが肝要である。ここに日本の国としての生命線があることを我々日本人はきちんと再認識すべきである。

14. 代金回収は至難の業

インドでのビジネスの中ではインドの会社への「売りの難しさ」が際立っている。回収を含めた売りの難しさは他の国の比ではない。いうまでもなく、インドでも次ページのような3点の要件を満たしている場合は、回収にそれほど手古摺らないが、これらの要件を満たしていない場合は、

代金回収が非常に難しいので十分に注意すべきである。

- (a) 日系企業と、日系企業の影響を大きく受けている会社(下請けなど)
- (b) 「売り手市場」のアイテムを販売している(他では生産不可の高い技術力を持っている商品)
- (c) インドの超大手一流企業

15. インドの取引先を訪問して自分の目で確かめる

インド企業と新しく取引を開始する際には、彼らが売り手であろうか買い手であろうか、彼らの会社を実際に訪問してみることを是非とも勧めたい。自社のオフィスに呼びつけるとかホテルの個室などでプレゼンテーションを聞くだけでは、相手のことは何もわからないと判断すべきである。インド企業のトップやそれに近い人たちのプレゼンテーション能力については、ものすごいものを感じる人が多い。極めて上手である。プレゼンテーションがうまいだけでなく、おしなべてインドの会社の幹部の人たちは大変優秀である。ただ、それを鵜呑みにするのは危険である。インドの多くの会社に共通していえることだが、トップの人たちの能力はかなり高いものの、実務部隊になると途端に質が落ちてしまうことがよくある。したがって、取引先を予告なしに訪問して、彼らの普段の姿をチェックすることが重要である。また、実務担当者によく話し合うことも重要である。トップは優秀でも実務クラスになると、とんでもないレベルの人たちが現れるということがよくあるのである。

16. インドの面積は旧 EU とほぼ同じ

インドの面積と拡大前の旧 EU のそれとはほぼ同じであるが、インドにも「英国」や「ドイツ」があって、それぞれの州が 1 つの独立国であると考えべきである。インドは各州によって民族・言語・文化が大きく異なる。また、州政府の中央政府に対する独立性も非常に高く、権限も州政府にかなり委譲されている。したがって、各州を一つの独立国と見る必要があるくらいである。人種も言葉も文化もこの広いインドの中では州によって大きく異なることを認識し、1 つの州が EU における 1 つの国というくらいに考えてちょうど良い。因みに、インドには「国有地」はなく、「州有地」である。

17. 進出する州の選定は慎重に

インドのどの州に進出するか、拠点をどこに設けるか、ということはそのプロジェクトの成否を決めるほど重要である。パートナーや主要顧客のロケーションから進出場所を決めてしまうケースが多いが、それだけで判断することは危険である。その州の政治はどうなっているか、貧困の度合はどうか、コンプライアンスに対する考え方はどうかなどを総合的に判断する必要がある。基本的に「貧困州」と「政治的に外から見えにくい州」は進出を見合わせた方が良いと思う。前者の代表がビハール州やオリッサ州であり、後者のそれは UP 州である。「貧困州」ということは農民の力が強く、州政府も農民に依存しているケースが多い。ということは土地収用などで農民ともめても州政府は味方になってくれない。また、後者についてはとても日本企業のコンプライアンス規定にあてはまらないことが多すぎる。「彼らの常識は我々の非常識」であることがすごく多いということである。

18. インドは中近東・アフリカ・欧州に近い

インドに進出する際に、どの市場を狙うのかということを考える必要がある。インドの魅力の 1 つは中国と同じように、11 億の人口に支えられた大きな国内市場があることは衆目の一致するところである。しかし、インドからの輸出となると東を見るよりも西をみるべきである。つまり、

インドという国の位置をもう一度考え直してほしい。石油価格の暴騰で注目されている中近東はいうにおよばず、今後の大きな伸びが期待されているアフリカもそれほど遠くない。さらに欧州でさえも、その間にインド程の大きくて発達した工業国がないことから、インドのロケーションは非常に良い位置にあるといえる。インドの東や南のアセアン市場向けとなると、同じような距離に日本・中国・タイといった強力なライバルがひしめいており、インドの優位性はそれほどないといえる。

19. イスラム教徒の人口の伸びが大きい

近年、イスラム教徒がインドでもかなり増えてきている。その比率は、12~13%と公式にはいわれているが、一説には20%近いという説もある。これには、彼らの出産率が非常に高いことも関係している。インドの上流階級(ヒンドゥー教徒)では、日本と同じく少子化が進んでおり、1人とか2人が非常に多いからである。インドの人口増加は年率で2%程度であり、これは毎年2千万人くらいずつ増加していることになる。つまり、台湾や豪州とほぼ同じ人口が毎年増えているわけだが、その多くはイスラム系の人たちの「貢献」によるものである。尚、日本ではインド人といえばターバンを巻いた人たちとの先入観があるが、このターバンはシーク教徒のものであり、シーク教徒の比率はわずか2%程度である。ここにもインドに対する「大きな誤解」がある。また、ヒンドゥー教は仏教と同じく「多神教」であり、この点はキリスト教とかイスラム教とは大きく異なる。したがって、他の宗教にも寛容であり、インドではラマダン明けもクリスマスも休日となる。このことは、日本人にとってインドで暮らしやすい大きな原因の1つである。宗教のしほりが少ないということは、我々日本人にとって極めてありがたい。

20. ベジタリアンは原則として上流階級

日本人がインドでつきあう中流から上流の人たちの半分以上はベジタリアン(菜食主義者)であるといえる。同じベジタリアンでも非常に厳格な人と柔軟な人に別れるが、(中には根菜類を一切食べないという人もいる)彼らと食事を一緒にする際は最大限の配慮をすべきである。特に彼らが日本に出張してくる時には神経質なほどに気配りをしなければならない。日本の精進料理と違うことも認識すべきである。具が野菜だから味噌汁は大丈夫だろうと安易に考える日本人が多いが、かつおの出汁はかつおが魚ゆえ、ベジタリアンには出せない食事である。このような配慮に欠けてベジタリアンをアテンドしていると、関係そのものが壊れてしまうことを理解しなければならない。日本でベジタリアンをアテンドする時は、あまり難しく考えないで、每晚インド料理屋に連れて行くという考え方で良いと思う。

21. インドの生活で身の回りの治安は非常に良い

デリーに5年間駐在していたが、私自身や家内が1度たりとも危ない目にあつたことはなかったし、家のことが心配で出張先から電話をしたこともなかった。また、在留邦人の仲間からも危険な目にあつたという話は1度も聞いたことがなかった。このことは、まとまった期間インドに住む駐在員にとっては非常に重要なポイントである。自宅で雇っている使用人が冷蔵庫の中の食品の1部を失敬するといったことはあるが、強盗などの凶悪犯罪に日本人が巻き込まれたという話は1度も聞かなかった。

22. インドの国内フライトはどんどん便利になってきた

インドの主要都市間(例えばデリー⇄ボンベイ、デリー⇄カルカッタ、ボンベイ⇄カルカッタ、デリー⇄バンガロール)は2時間前後である。2年位前からインドにおいても国内線を中心に数多

くの民間航空会社が進出してきた。安い運賃を売り物にしている会社がほとんどだが、中には赤いミニスカートを客室乗務員にはかせて、手厚い機内サービスをセールスポイントにしている航空会社も出てきている。国内線には多数の航空会社が進出してきており、競争は激化している。乗客側の選択肢が広がっており、快適な出張ができるようになってきた。民間最大手の JET AIRWAYS は国際線にも積極的に進出しており、実際に出張で何度も使用したが、そのサービスもなかなか洗練されている。また、インドの多くの国内線のフライトは朝と夜に集中しており、日帰り出張には非常に便利な時間設定であり、効率的な仕事ができるようになっている。インドは大きな国ではあるが、移動はかなりしやすくなってきている。

23. インドの政治的リスクは限りなくゼロに近い

「投資」ということを考える場合に、その国の政治的リスクがどのくらいあるのか？ ということは、極めて重要な要素である。その国の政権がいつ倒れるかわからないような国にはとても大きな投資はできない。インドの政治的リスクは限りなくゼロに近いといっても過言ではない。2004年の前回の総選挙では大方の予想を覆して、当時の与党であった BJP が大敗して、CONGRESS へ政権移譲されたが、その政権移譲そのものが平和的・民主的に行われ、一切の政治的な混乱も空白もなかった。これだけ、「民主的」な政権移譲が可能なアジアの大国は日本とインドだけといってもよいくらいに立派なものであった。負けた BJP のバジパイ前首相が「今度の選挙と一連の手続きの過程において、インドの民主主義の偉大さを世界に伝えることができた」との演説をしたが、決して負け惜しみではない、格調高い名演説であった。その後の政策を見ても両党にそれほど大きな差はなく、日本でいえば自民党から民主党に政権が代わったという程度である。決して自民党から共産党に政権が代わったということではない。因みに選挙に勝利した際に、CONGRESS の総裁のソニア・ガンディーが首相になるのかということが話題になったが、外国人(イタリー)である彼女は首相にはならず、手堅い政治手腕を買って現在のマンモハン・シン氏を首相に推した。4年経過した今でも、彼女のこの判断の素晴らしさは光っているといえる。当時、BJP からは、外国人を首相にして良いのかというかなり強烈なキャンペーンが行われたが、彼女は正面突破をせずに力を温存する道を選んだ。彼女の狙いは次の次の選挙で自分の息子を首相につけることにあると広くいわれているが、それに向かって順調に歩み続けているといえるのではないか。

24. インドは法治国家

この国は「法治国家」であり、お隣の「人治国家」とは大きく異なる。たしかに、過去には日本企業を狙い撃ちしたような税金問題(個人所得税)が起こり、多くの日系企業がかなりの金額の追加の税金を払わされたが、その後の国との裁判で勝訴して、一部を取り戻したりした会社もあった。しかも、その間の金利付きで返金された。このようなことは、中国ではとても不可能な話だと思う。また、マルチ・スズキの大株主であるスズキ自動車とインド政府が訴訟で争ったが、外国民間企業であるスズキがその訴訟に勝って、現在は過半数を超える株式を保有していることは有名な話である。これらの事例からインドが真の意味で民主主義に根差した国であることがお分かり頂けると思う。

25. 法務・税務が極めて重要

日系企業のインドへの投資の促進は等しくインド政府高官の望む所であり、インド側の日本への不満の1つに、なかなか増えてこない日本からの投資という問題がある。一方、日系企業の側からすれば、よくわからない税金システムと社会主義時代の名残ともいえる労働法がある。特に後

者は簡単に従業員をクビにできないという点において、日系企業にとって、かなり厳しい足かせになっている場合がよくある。現在の政権は Congress と共産党などの左翼政党との連立であることから、この問題には突っ込みづらい状況にあることは否定できない。理由はそれぞれ異なるが、天下のトヨタでもホンダでもかなりの規模の争議があったことも事実である。インドへの投資を考える際には、その企業の法律の専門家を出張させて、インド人の弁護士やインドの税務に通じた会計コンサルタントとじっくりと打ち合わせすることからスタートすべきである。日系進出企業が裁判に巻き込まれるケースはかなり多く、判決が出るまでに天文学的な時間がかかっているようである。特に会社を辞めさせられた人が会社を訴えるということが多いようである。

26. 親日的な人が多い

インド人の大多数が親日的であることはほとんどの在留邦人が認めることだと思うが、それもそのはずで、第2次世界大戦を含めて日本とインドの間にはいわゆる歴史問題は皆無である。それよりも、東京裁判において、この裁判自体が国際法上の違法であることを訴えたパル判事も、ノーベル賞受賞者で日本と関係が深い詩人であるタゴール氏も、有名なチャンドラ・ボース氏も全て西ベンガル州出身のインド人である。現在も西ベンガル州(コルカタのある州)に親日的な人が多いことと関係しているのかもしれない。よく中国に駐在している人たちから聞く言葉に、「中国に住んでいると疲れる」というのがある。インドに住んでいると「何となくほっとする」というのは好対照である。古い話で恐縮だが、2004年9月8日のコルカタでのW杯サッカーの予選を応援に行ったが、その直前に日本代表チームが、重慶と済南のアジアカップで味わった中国での悪い思い出とは180度異なる友好的な雰囲気の中で試合が行われた。この時、試合途中で40分ほど停電となってしまい、試合の進行が遅れたことを記憶されている方々も多いと思う。しかし、その状況をつぶさにスタンドで見れていたが、これこそインドだなと思ったことばかりであった。6万人近い観衆が全く騒がずに、静かに待っていたこと(停電慣れか?)、さらにこの停電がなぜかハーフタイムにあって、試合そのものに深刻な影響を与えることがなかったことが印象的であった(これは単なる偶然か?)。インド人の鷹揚さとインドの国としての運の強さのようなものを感じた。因みに停電の原因は発電機にねずみが巻き込まれたという、これまたいかにもインド的なものであった。尚、試合前日に日本チームの公開練習をスタンド見ている時に、インドの有力紙の取材を受けて、明日の試合についての予想を求められた。これに対して私からは、「先のアジアカップで中国の複数の都市で国歌斉唱の際にもブーイングをされ、最後の首都北京の試合では中国が日本に負けたこともあって、日本公使の車が破壊されてしまった。明日のインドとの試合ではこのようなことは一切起こらずに、非常に友好的な雰囲気の中で試合が行われると思っている。試合結果は時の運としても、友好的な雰囲気の中で試合が行われることを強く望むし、そのように信じている」とのコメントを述べさせてもらった。翌日のその新聞に極めて正確に私の談話が載っていたことも良く記憶している。その国に投資を考える際に、その国が親日的であるか否かは非常に重要な要素になる。その点からもインドが中国とは比較にならない存在であることがご理解頂けると思う。

27. 百聞は一見にしかず

世界の大国の中で、インドほど日本人から誤解されている国も珍しいと思う。私事で恐縮だが、私は過去に New York と London という世界を代表する大都市に駐在してきた。デリーは3番目の駐在地であった。2003年3月にデリー駐在の話をもらい、多くの友人に電話で3回目の海外駐在の辞令が発令されたことを連絡した。その際に、電話の向こう側の友人たちは、「次はどこなの?」と計ったように聞いてきた。「インドのデリーだよ」というと、3~5秒くらいの沈黙があった。相

手はどうやって私をなぐさめようかとアタマをフル回転でめぐらせていたわけで、当時のインド駐在はそのくらいに「同情」されたようである。しかし、実際に住んでみると「住めば都」という以上の所であった。5年間住んでみてもまだわからないことだらけで、もう少し長くいても良いなと家内と話し合っていたくらいであった。おそらく現在インド駐在する人たちは、彼らの友人から「良かったね、インドは伸びている国だし、仕事もたくさんありそうだね」といったことを言われているのではないか。日本人のインドに対する印象がずいぶんと変わってきたことだけは間違いないわけで、私が経験したような友人たちから「同情される」ということはなくなりつつあると見ている。5年の駐在の間にかかなりの数の日本からの来訪者をアテンドさせていただいたが、その多くの方々から、「インドはすごいね。これならもっと早く来るべきだったね」という発言を聞いた。やはりインドの新しい息吹を感じてお帰りいただく方々が非常に多く、実際に自分の目で見て初めて理解できたといわれた方が非常に多かったと記憶している。

28. 11億の民を治めているのは1万人？

駐在期間中に、インド人の有力者から夜のパーティーに招待されたことがかなりあったが、知合いを増やす絶好の機会であるので、できるだけ招待を受けるようにした。いろいろなパーティーに招待されたわけだが、その席で会う人達の多くが本当によく重なっていた。「彼は僕の親戚」とか「あの人は僕と学校の同級生」といった言葉をたくさん聞いた。カースト制度に支えられた1部の人たちが支配する社会構造になっていることを肌で感じたことが非常に多かった。このことから今の「支配構造」が簡単に変わっていくとはとても思えない。既存の権益を守ろうとする勢力がしばらくは優勢で、現在の社会構造が大きく変化することはないと見ている。

29. うさぎとかめ？

中国とインドの発展をうさぎとかめの話に例えては、中国に怒られてしまうであろうか？ 民主主義に基づいたインドの政治的な安定性は、共産党の1党独裁による中国とは比較にならないほどだと評価している。その民主主義ゆえに、インドの動きは中国と比較するとかなり遅いといわざるをえない。「遅々として進んでいる国インド」という言葉をよく使ったが、正にかめのようにのろい動きながら、確実に歩を進めていっていることも事実である。大いなるインドファンの1人として、いつの日か「うさぎとかめ」の競争結果が実現することを祈っている。

3. JICA だより 第 3 回

第 3 回目の「JICA」だよりは、プネ大学で日本語教育をおこなっている海外青年協力隊・日本語講師の吉田健吾氏による寄稿です。インドのちょっとした日常から、考えさせられます。

<吉田健吾氏 略歴>

平成 19 年 9 月 平成 19 年度 2 次隊として着任
1 ヶ月の現地語訓練を受ける
10 月 プネ大学へ派遣
現在 31 歳

<活動内容>

プネ大学外国語学部において同僚講師と共に授業を実施しながら、シラバスの改善、講師対象の日本語勉強会の実施、副教材の作成や映画上映会の実施等、配属先唯一のネイティブ講師として日本語教育の活性化に協力している。

あなたならどうする？

「みなさんなら、どうしますか？」

ある日の日本語クラスで、一枚のイラストを見せながら質問を投げかけた。一人の若い女性が駅の前で待っている絵である。「あなたは友達と買い物に行く約束をして駅で待ち合わせをしましたが、20 分遅れてしまいました」

次に選択肢が用意されていて、「A: 走って友達のところへ行って謝る」「B: とくに何もしない」とある。日本人だったら(そして私も)、どちらかと言えば、A を選ぶだろう。そしてインドならば B だと思っていた。実際ほとんどの学習者は B を選んだ。

しかし数人が A だと言った。不思議に思い理由と聞いてみると、「インドでは駅の前で女性が一人でいるのは危険だから」とのこと。なるほどインドの駅は治安が悪いからと苦笑いしたが、同時に女性に優しいなとも感じた。

数日後、私は学校の門に近い花壇の縁に腰掛けて休んでいた。しばらくして初老の男性が白い杖をつきながら、門に近づいてきた。どうやら目が見えないようだ。門の近くは最近の道路拡張工事ですごくぼこぼこしていて、なかなか入れない。私はどうしようかと迷っていた。すると若い男性が通りかかり、何も言わずに盲人の手を引き、門の中へ入れてあげた。両者は「ありがとう」「いいえ」もなく別れた。初老の男性は次に建物の方へ向かう。しかしどの建物かわからない様子。すると一人の



写真 学校の門の近くの風景

女性が現れ、ポンと男の肩をたたき、「あっちだよ」と体の向きを変えさせて、道を示す。男はやっと建物の入り口近くにたどりつくが、今度は狭い階段があつて上りづらい。するとまた別の男性が通りかかり、盲人を入り口まで導いてあげると、すぐに消えてしまった。赤の他人の 3 人がさっと現れ、さっと手を貸し、さっと去っていく。この間約 1 分。あたかも 3 人が申し合わせたようで、自然だった。心にさわやかな風が吹き抜けるのを感じた。しかし自分なら、果たして同じ選択をして、あの 3 人のように自然に振る舞えただろうか。

4. インド・ニュース(2008年11月6日~12月6日)

1. 下院選挙及び州議会選挙へ向けて各党の動き

★ **कांग्रेस党の長老であり AICC 幹事長でもあるマーガレット・アルバ女史は、カルナタカ州議会選挙において、彼女の息子に対する党公認切符が付与されなかった点に異議を唱え、公認切符が金で売られていると主張。マーガレット・アルバは党の綱紀査問委員会にかけられ、幹事長職を罷免されたのみならず、全インド कांग्रेस 作業部会および कांग्रेस 党選挙委員会からも辞任を余儀なくさせられた。**

(*11月8日、11日および13日タイムズ・オブ・インディア紙)

○ **マーガレット・アルバに続いて指定カスト担当局長ヨゲンドラ・マクワナより「 कांग्रेस 党はラジャスターン州のアルワールの選挙区切符が 2500 万ルピーで売買されている」との衝撃的暴露がなされた。**(*11月12日タイムズ・オブ・インディア紙)

★ **チャッチスガル州の議会選挙は、11月14日、39議席につき、11月20日、残りの51議席について実施される。90議席のうち29議席が指定部族に、10議席が指定カストに割り当てられているところ、同州の民族社会主義党(BSP)支部長ラトナカルは「BSPは指定部族および指定カストにかなりの勢力を浸透させており、今回の選挙では कांग्रेस も BJP も過半数をとれないと思われるので、BSPはキング・メーカーとなるであろう」と語った。**

(*11月8日タイムズ・オブ・インディア)

○ **11月14日**にナクサライトの影響の強いチャッチスガルの39選挙区で投票が行われ、投票率は53%と推定されている。選挙は前例のない治安警戒下に実施され、部族地域においては、投票に出向く人はまばらであった。(*11月15日タイムズ・オブ・インディア紙)

○ **11月20日**、チャッチスガル州の残りの51選挙区で投票が行われ、投票率は68%以上であった。ただし、5選挙区で州民は投票に出てこなかった。(*11月21日ヒンドゥ紙)

★ **社会主義政党(SP)の総裁代行イランゴ・ヤーデブはタミルナド州の下院議員選挙に10人を立候補させることが決定されたとした上で、「タミルナド州支部はSP党首ムラヤム・シン・ヤーデブに対し来る下院選挙で、タミルナド州のチルチアパリもしくはラマナタプラムから出馬してもらうよう圧力をかけるであろう。タミルナド州から下院選挙に出馬を要請する1万の電報と10万の葉書がムラヤム・シン・ヤーデブに届くであろう」と語った。**

(*11月10日ヒンドゥ紙)

★ **選挙直前の11月16日**、ジャンム地区のBJP副総裁ハリ・オム教授は कांग्रेस 党に入党した。同氏は州議会選挙への候補者の選定方法をめぐり指導部と意見を異にし、10月30日BJP党を離党していた。(*11月17日タイムズ・オブ・インディア紙)

★**11月17日**、ジャンム・カシミール州議会選挙第1回目の投票が10選挙区で実施された。投票は比較的平穏離におこなわれ、投票率は64%であった。

(*11月18日タイムズ・オブ・インディア紙)

○**11月22日**、ジャンム・カシミール州議会選挙第2回目の6選挙区において、分離主義者たちの選挙ボイコットの呼びかけにも係らず選挙民50万人の65%が票を投じた。前回2002年における投票率は50%であった。(*11月23日インディアン・エクスプレス紙)

★ティランジーヴィに率いられるプラジャー・ラージャム党に**11月15日**、2人の元連邦大臣が入党した。(*11月16日ヒンドゥ紙)

★**11月13日**ラジャスターン州首相の親しい相談相手ヴィシュウェンドラ・シンは、同州の議会選挙の候補者選定が金で左右されていると言い立てて、BJP党を離党した。シンは कांग्रेस党に入党し कांग्रेस候補としてデーグムヘル選挙区から立候補することとなった。

(*11月17日ヒンドスタン・タイムズ紙および11月17日タイムズ・オブ・インディア紙)

★元総理大臣でジャナタ党(世俗主義)総裁H・D・デーヴ・ゴダは**11月22日**、元タミルナド州首相でAIADMK党首ジャヤラリータ女史は第3戦線に加わるであろうと明言した。ジャヤラリータとBSP党首でUP州首相でもあるマヤワティー女史との関係についての質問に対しては、「ジャヤラリータの主要なライバルはDMKの党首でタミルナド州首相であるカルナニッディであるので、ジャヤラリータとマヤワティーは何の問題もない」と応えた。

(*11月23日ヒンドゥ紙)

○**12月15日**、CPI(M)とAIADMKは来年の総選挙のために選挙協調をすると発表した。この決定はCPI(M)の書記長プラカーシュ・カラットとAIADMK党首ジャヤラリータとのチェンナイでの会合の後発表された。(*12月5日ヒンドスタン・タイムズ紙)

★**11月27日**のマッディヤプラデーシュ州議会選挙を前に**11月24日**選挙戦は最高潮にたった。BJP党も कांग्रेस党も共に、自党へのウェーブも感じられず、人々が興奮もしていない選挙区へ、トップの指導者キャンペイナを投入した。

BJPは同党総裁ラジナート・シン、総理大臣候補L・K・アドヴァニ、グジャラート州首相ナゲンドラ・モーディが3日にわたり、プラギャ尼僧の逮捕につき激しくテロ特捜班を攻撃し、尼僧のような崇高人を辱め、陸軍軍人に汚名をきせていると、 कांग्रेस党とマハラールシュトラ州のテロ特捜班を非難した。

他方、 कांग्रेस党総裁ソニア・ガンジーは、BJPは開発プロジェクトのための中央の基金を誤って使っており、2003年の人々に対する公約を履行していないと批判した。

今回選挙ではマヤワティの BSP 党のほかウマ・バラティの BJSP 党(注)も選挙戦に参画しており、230 選挙区の中の 120 選挙区では激しい選挙戦が予想されている。

(*11 月 25 日ヒンドゥ紙)

(注):ウマ・バラティは 2003 年のマッディヤプラデーシュ州議会選挙で BJP に 4 分の 3 の圧倒的勝利をもたらした立役者で、州首相に就任したが、2004 年 8 月 L・K・アドヴァニをテレビ・カメラを前にして公然と激しく非難したため、BJP 党籍を停止され、2005 年末シヴラージ・シン・チョウハン州首相の就任に反対したため、BJP 党から追放され、BJSP を結成。現在に至る。

2. テロ関係

★11 月 12 日 マハラシュトラ州のテロ特捜班(ATS)は宗教指導者自称スワミ・アムリタナンド、本名ダヤナンド・パンデイをマレガオン事件との関連でカンプールにおいて逮捕した。逮捕は、BJP 総裁ラジナート・シンが「テロとの戦いとの名目でヒンドゥの聖者を犯罪に連座させようとしている」と kongress の火遊びを警告した日になされた。VHP の指導者 S・K・ジェインは「捜査は魔女狩であり、ムスリム・コミュニティに取り入ることを狙ったものである」と語った。(*11 月 13 日ヒンドスタン・タイムズ紙)

★11 月 13 日 VHP(世界ヒンドゥ協会)はマレガオン爆破テロ関連でヒンドゥの聖職者が逮捕されたことに抗議する全国規模のアジテーションを展開すると宣言した。VHP 総裁ラマカット・ドゥベイは「VHP、バジラング・ダル等の民族主義組織を犯罪に巻き込もうとする陰謀を UPA 政府は企てており、彼らは宗教指導者や聖人すら容赦しない」と語った。

(*11 月 14 日タイムズ・オブ・インディア紙)

★11 月 15 日 BJP 総裁ラジナート・シンは「マレガオン事件の捜査は大掛かりな陰謀であると信じている。マハラシュトラ州は kongress と民族主義 kongress の連立政権であることを想起すべきである」と語り、マレガオン事件の容疑者プラギヤ・タクール尼僧については、「彼らは関与していないと確信している」と断言した。

(*11 月 16 日タイムズ・オブ・インディア紙)

★11 月 16 日、RSS(民族奉仕団)、VHP(世界ヒンドゥ協会)および BJP はヒンドゥ社会、ヒンドゥの預言者たちやインドの軍人にテロの汚名を着せようとしている UPA 政権を非難するための集会を開いた。右集会には BJP 総裁ラジナート・シン、RSS 総裁 K・C・スダルシャン、VHP 国際総裁アショク・シンガール、VHP 幹事長プラギヤ・トガディア、BJP が政権をとっているヒマーチャル・プラデーシュ州及びウッタラカンド州の両首相、ヒンドゥ教指導者等が出席した。マレガオン事件に係る逮捕につきマンモハン・シン首相に対する個人攻撃を起こしている RSS 総裁スダルシャンは「ヒンドゥ・テロリズムの概念は全く狂気の沙汰である」と語り、ヒンドゥによるテロを否定した。また、サング・パリワールの最高幹部は匿名

を条件に「サング・パリワールは州選挙や下院選挙で BJP を支持する集会やキャンペーンをしないという従来の方針を変更し、サング・パリワールは BJP と再統合し、ヒンドゥの信念を守り、イスラムのテロに対抗すべく行動する」と語った。

(*11月17日タイムズ・オブ・インディア紙)

★11月19日 BJP の総理大臣候補者 L・K・アドヴァニはプラギヤ尼僧の逮捕に関する沈黙を破り、「テロ特捜班(ATS)によって拷問されたとの尼僧の主張を調べるべきである」と要求し、また「陸軍中佐スリカント・プラサド・プロヒットに対する捜査は政治的動機により・不適切になされたので、ATS チームを更迭すべきである」と語った。

(*11月20日タイムズ・オブ・インディア紙)

日印協会註:テロといえばこれまでは、インディアン・ムジャヒディンといったムスリム過激派の専売特許の感があったが、9月29日のマハラシュトラ州マレガオンでの爆破テロ関係で BJP の青年部組織 ABVP の元全国書記プラギヤ・シン・タクール(尼僧)、退役陸軍少佐ラメーシュ・ウパディヤイ、更には、現役の陸軍中佐プラサド・シカント・プロヒットが次々に逮捕されたのみならず、ヒンドゥ聖職者の大物ダヤナンド・パンディ(自称スワミ・アムリタナンド)もマレガオン・テロ関連で逮捕されたことで、ヒンドゥによるテロの問題が始めてクローズアップされることとなった。ヒンドゥによるテロで特に懸念されるのは、テロの背後に BJP、VHP、RSS、サングパリヴァール、ABVP といった政治組織のみならずヒンドゥ教の宗派組織および軍の一部が存在している可能性がでてきたことである。ちなみに、ABVP は BJP の青年部組織で、中央政府の産業大臣や法務大臣を務めたこともある現 BJP 幹事長アルン・ジャイトリも ABVP の学生指導者であったことを考慮にすれば、この ABVP の全国書記を務め、グジュラート政府から資金援助を受けモーディ・グジュラート州首相を支持する選挙運動をしてきたといわれるプラギヤ・シン・タクールが爆破テロの容疑者として逮捕された意味合いは大きい。シブ・セーナのバール・タッケライがマレガオンの容疑者たちを擁護したこと、および BJP のスポークスマンがこのシブ・セーナを擁護する発言をしたことは、先月号で触れたが、これら容疑者たちの犯行事実と犯人相互の役割関係がテロ特捜班の捜査(パンディから押収したパソコンに会話の録音、写真、犯罪に関連する資料等が満載されている)で次々と明らかにされているにもかかわらず、野党第一政党で前 NDA 政権を主導した BJP 党の総裁ラジナート・シンおよび総理大臣候補の L・K・アドヴァニという BJP の最高指導者が、これらのテロ容疑者を擁護し、マレガオン事件の捜査は UPA 政府の大掛かりな陰謀であると主張するに至った。

特に、アドヴァニは、国家安全保障顧問 M・K・ナラヤナンよりマレガオン事件に関する詳細報告(パンデ、シャヤム・アプテ、プロヒット中佐等が穏健派の RSS(民族奉仕団)指導者モーハン・バグワット(RSS のナンバー2)及びインドレッシュ・クマールの殺害を計画していたこと等)の説明を受けた後も、「プラギヤ・シン尼僧やその仲間が RSS の何人かの指導者を殺そうと計画していたなどという途方もないことをテロ特捜班(ATS)は暴露している。特捜班が公にしている情報は kongress に政治的な利点を与えるためになされている。インドの人民

はプラギヤ・シン尼僧を逮捕し痛めつけたUPA政府を決して許さないであろう」とテロ特捜班を非難し続けており（*11月23日インディアン・エクスプレス紙）、BJPはシブ・セーナと共に、12月1日にマレガオン爆破事件の容疑者に対する非人道的取り扱いに抗議するためにマハラシュトラ・バンド（州全土で交通を止め、商店を閉鎖するストライキ）を行うと宣言し、あくまでもマレガオン事件のテロの容疑者達を擁護し続けている。これは「テロ撲滅」を強硬に主張し、テロを取り締まれないUPA政権を糾弾してきたBJPの従来の方針に明らかに反するものである。

他方、かかるBJP幹部の主張とは裏腹に、VHP（世界ヒンドゥ協会）の幹事長P・トガディヤがマレガオン爆破事件の容疑者たちを支援していた下部組織 abhinabu bharat（今のインドの意味）の設置に関与していたことも、プローヒット中佐の中央捜査当局に対する自供で明らかになっており（*11月24日インディアン・エクスプレス紙）、また、国防大臣A・K・アントニーも11月24日、「陸軍はマレガオン爆破事件関連でマハラシュトラ州の特捜班（ATS）の捜査に全面協力する」と語っており、ATSの捜査により、事件の全容が明らかになるのは時間の問題となってきた。このような捜査の進捗を反映し、これまでヒンドゥ・テロを否定してきたRSSも（民族奉仕団）、マダン・ダス・デヴィ（joint general secretary）が**11月22日**、マレガオン事件の容疑者達がRSSの指導者2名を暗殺しようとしていたことを認め、「ヒンドゥの組織を中傷すべきではないが、テロリストは処罰すべきである」と発言、さらに**11月25日**にはRSS総裁K・S・スダルシャンもマレガオンの容疑者に言及することなく、無辜の人々を殺害する暴力をテロとして強く非難し、マレガオン事件の容疑者たちと距離を置く方向に進路を転換した。また、全インド・ヒンドゥ・マハーサバーは、かかる動きに先立ち、**11月22日**、「BJPはマレガオン爆破容疑者たちを支持することでヒンドゥの感情を政治的に利用しようとしている」とBJPを非難するに至った。このように、マレガオン爆破テロを契機としてヒンドゥ・コミュニティ内に微妙な亀裂が生じつつある点が注目される。

★11月26日夜マハラシュトラ州ムンバイで、駅、ホテル（タージホテル、オベロイホテル）、国内飛行場、病院（カーマおよびGT病院）、多目的娯楽施設、マズガオン造船所、イスラエル人の宿泊施設ニルマン・ハウス等10箇所で、ほぼ同時刻に爆弾や、AK-47ライフル、機関銃、手榴弾等で武装した集団が無差別テロ攻撃を行い、タージホテル、オベロイホテルやニルマン・ハウスで多くの外国人を人質にとり、治安当局と銃撃戦を展開したが、60時間後の29日朝タージホテルに立て籠もっていた最後の1人のテロリストが射殺され、テロは鎮圧された。このテロで183人が死亡し327人が負傷した。民間人は外国人22人を含む141人が死亡し、治安部隊は、マレガオン爆破テロの追及で名を上げテロ特捜班の隊長ヘマント・カルカレ他2名の幹部を含む22人が死亡した。

銃撃戦の後、治安部隊はオベロイ・ホテルで250人、タージホテルで300人、ニルマン・ハウスで12家族60人の人質を救出した。テロリストは全部で9人が射殺され、1人が生きて逮捕された。なお、デッカン・ムジャヒディンと自称する組織が犯行声明を出した。その実体は不明なるも、パキスタンのカシミールに根拠を置くラシカール・イ・トイバーの関与が逮捕されたテロリストの供述、各種証拠で明らかになりつつある。

(*11月27日～29日インディアン・エクスプレス等インド各紙)

日印協会註:

(イ) **10月30日** アッサムの州都グアハティで発生した62人の死者を出したテロにつき犯人と疑われたUFLA(アッサム解放統一戦線)は、犯行を否定し、「RSSが事件の背後に居る」と主張しているとの報道もあり(*11月22日～12月5日フロントライン)、いまだに事件の全容が解明されていないこと

(ロ) 今回死亡したテロ特捜班長が、これまで「殺すぞ」と何者かから脅迫されていたこと
(*11月28日インディアン・エクスプレス紙)

(ハ) テロ特捜班のトップ3人が乗ったジープが最初に襲われ、3人とも死亡した点が釈然としないこと

等もあり、ムンバイにてテロ発生とのニュースに接し、一瞬、ムスリムの名を騙ったヒンドゥ側のテロかとも疑われた。

しかし、今回のテロは従来とのテロとは様相を全く異にしており、周到に計画されかつ十分訓練された組織的テロであり、テロリストたちが海から侵入し、テロ攻撃にあたり、パキスタンからの携帯電話で詳細な指示を受けていたことが判明しており、逮捕されたテロリストの供述等から、ラシュカール・イ・トイバ(LeT)の関与が明らかになりつつある。LeTは**2001年12月**インドの国会議事堂を襲撃したが、LeTはその当時パキスタンの情報機関ISIの支援を受けていたため、印パ関係が核戦争の瀬戸際まで極度に緊張したのは記憶に新しい。このLeTが、何故この時期に、このような大規模なテロを敢行したかについては、今後明らかとされるところと思われるが、以下の点は考慮に値すると思われる。

- (イ) パキスタンのザルダリ大統領は就任以来インドとの関係改善を最重要課題として打ち出しており、カシミールのイスラム分離主義者をテロリストと名指しで非難し、カシミール情勢の安定化に努めていたこと。
 - (ロ) ジャンム・カシミールにおける管理ラインを越えた貿易の開始を含む一連の信頼醸成措置が着々と講じられており、今回のジャンム・カシミール州議会選挙でも、分離主義者たちの選挙ボイコットの呼びかけにも係らず、60%以上の人々が選挙に出向たことから明らかなように、カシミール州民も、自分たちの現実の生活向上のために一票を投じることの重要性(民主主義制度の重要性)に気づき始めたこと。
 - (ハ) オバマ次期米国大統領がアフガニスタンにおけるテロとの戦いを重視しており、パキスタン軍がアフガンとの西部国境沿いに配置されたため、東部のインド国境沿いの軍が減少しカシミールへの侵攻兵力に不足をきたし、結果としてカシミール情勢が平静化の方向に向かっていること。
- (ニ) 西部国境沿いに配備されたパキスタンの兵士の士気は低く、脱走者が続出していたこと。
すなわち、上記のような状況下において、印パ関係の緊張関係を生み出しパキスタンが西部に配置している軍を東部の印パ国境沿いに移動させることに利益を持つ勢力が、今回のテロ

の背後にいるとも考えられる。

パキスタンの情報機関 ISI は陸軍に属し、必ずしもパキスタン政府の指揮命令に服さず、独自の行動をとりがちであるといわれているが、今回のムンバイ・テロに ISI がどの程度関与していたかは、印パ関係を左右する重大問題となろう。

また、BJP の L・K・アドヴァニはマンモハン・シン首相の「二人一緒にムンバイを訪れ、テロに一致団結して戦う姿勢を示そう」との呼びかけを拒否したが、BJP が कांग्रेस党と共同してテロの脅威に立ち向かうのではなく、選挙での勝利だけを意識し、テロに弱腰と कांग्रेस党を非難する運動を展開していくとすれば、これが印パ関係にマイナスに作用することが懸念される。

すなわち、BJP が कांग्रेस党を「テロに弱腰」と追及していけば、 कांग्रेस党としても選挙を戦っていくために、パキスタン政府に強硬姿勢で望まざるを得なくなり、これが印パ間の緊張を高めることが十分考えられるからである。

★11月30日、P・チダンバラム財務大臣はムンバイ・テロ事件の責任をとり辞任したシブラージ・パテルに代わり内務大臣に就任した。マハラシュトラ州副首相 R・R・パティルは12月1日辞任した。V・デシュムク州首相も2日前に辞表を提出済みで、一両日に辞任する見込。(＊12月1日タイムズ・オブ・インディア紙)

★11月30日、ニューデリーにおける全政党の集会で全政党はテロとの戦いにおいて団結し、ムンバイ・テロのような襲撃を阻止するために、連邦捜査庁の設置を含む多くの措置につき満場一致で合意した。(＊12月1日ヒンドゥ紙)

★ムンバイ・テロ事件を踏まえ、インドがパキスタンにいかに対応するかが注目されていたが、マンモハン・シン首相が、米国ブッシュ大統領、ロシアのメドヴェージェフ大統領および日本の麻生首相に送ったメッセージは、「これはインド・パキスタンの問題ではなく、誰にでも関わるテロの問題である」とするものである。3人の指導者はインドを支援することを再確約した。(＊12月1日タイムズ・オブ・インディア紙)

★12月1日、インド政府はパキスタンのマリク高等弁務官を外務省に召喚し、パキスタンの領土内にあるムンバイ・テロ襲撃の責任者に対し強い行動(strong action)をとるよう要求する抗議(demarche)を行った。右召喚の決定は11月30日マンモハン・シン首相によって召集された全党集会でなされた。インド・パキスタンの冷え込んだ関係にもかかわらず、当局は西部国境への軍移動の憶測を打ち消し、インド・クリケット・チームのパキスタン行きをキャンセルする決定はまだなされていないと主張した。(＊12月2日ヒンドゥ紙)

た。かかる動きは MNS に流れるかもしれないマラティ人の票を食い止めるための選挙をにらんだ工作と見られている。(※11月18日タイムズ・オブ・インディア紙)

★誕生して3年目の MNS はムンバイのムスリムが支配的な場所でも目立った存在になっており、MSN の 20 代 30 代の党員は、過去数ヶ月の間に共感するムスリムを大量に党員に組み入れている。(※11月18日タイムズ・オブ・インディア紙)

★ラージ・タツケリが率いる MSN は、反北インド人キャンペーンで多くの波風を立てているが、ムンバイのムスリム・コミュニティでは支持を得ている。「3~4 か月の間に 2000 人のムスリムが党員に登録された」と MNS の地区リーダーのヴィレンドラ・パティルは語った。(※11月19日インディアン・エクスプレス紙)

4. 国際関係

★11月9日ムカジー外相がアルナチャル・プラデーシュ (AP) 州ワタンで行ったスピーチ次のとおり。

○AP は中国、ミャンマー、ブータンの 3 カ国と国境を接している。我々は、北方の偉大な隣国である中国との間に温かい関係を保っている。我々は中国との間では国境問題の解決に未だ至っていないが、両国の特別代表が、平和と友好の国境を創り出すための、公正で理性的な、双方が受入可能な解決を見出すべく共に取り組んでいる。

○中国側は、AP が印の不可分の領土の一部であることを十分に認識 (fully aware) している。同時に、私は、中国との間に友好的かつ協力的な関係を築き、中国と我々の周辺諸国との間の経済及びその他の協力を拡大させるために、あらゆる可能性を追求していくことに一貫して努力している。我々は AP と中国との間で国境貿易を開始し、国境の両側におけるコミュニティに経済的機会をもたらすべく、中国の友人を今後とも説得していく。

(※11月10日在印日本大使館公電)

★11月12日、オバマ次期大統領は、シン首相に電話をかけ、シン首相がかつて蔵相として、そして現在首相としてインドの発展に貢献していることを賞賛し、米印パートナーシップは非常に重要なパートナーシップであり、米の次期政権はインドと共にあらゆる課題に取り組んでいく所存であると述べた。シン首相はオバマ次期政権を温かく祝福し、同氏の歴史的勝利は世界中の抑圧されている人々にとり勇気の源泉であると述べた。

(※11月12日在印日本大使館公電)

★インド経済サミットに出席したキッシンジャー米元国務長官は 11 月 16 日、「米印両国の

国益は補完的のみならず殆ど一致しているが、パキスタンとアフガニスタンがオバマ政権に深刻な挑戦を突きつけるであろう」と述べた。

(*11月17日インディアン・エクスプレス紙－在印日本大使館公電)

★ムバラク・エジプト大統領の訪印(11月16日～19日)に際し発表された印・エジプト共同宣言中主要な点次のとおり。

○両国指導者は、現行の2国間、地域及び国際的問題に関する定例政治協議メカニズムを活性化させるために、外相ないしその代表者レベルの戦略対話メカニズムを設置することを決定した。また、双方は安全保障政策対話の設置についても同意した。

○両国指導者は、パレスチナの主張に対する支持を改めて表明した。インドは、アラブ和平プランに対する支持を改めて表明した。両指導者は、パレスチナにおけるイスラエルの入植地拡大の終結とパレスチナ内のヒトとモノの自由な移動に対する制限の早期且つ実質的な緩和を呼びかけた。

○両国は、平和と安全の維持における国連の中心的役割の強化に向けて今後も共に取り組んでいく。また、両国は、現状を反映させるため、国連改革プロセスを加速させる必要性を強調した。

○両国は、テロについて、如何なる形・目的によるものでも強く非難する。両国は、あらゆるレベルにおいてテロとの闘いにおける協力の強化に対する決意を再確認する。

(*11月19日在印日本大使館公電)

★12月5日、インドとロシアは民生核協力に関する協定に署名した。シン首相はロシア大統領との共同記者会見において、ロシアとの民生核協力協定への署名は核エネルギーの分野におけるロシアとの協力において画期的なことであると語った。

(*12月6日タイムズ・オブ・インディア紙)

5. イベント情報

(1) グジャラト印日協会会長 ムケシュ・パテル氏(Mr. Mukesh M. Patel)来日



〈協会事務局訪問 平林理事長ら事務局スタッフと面談〉

11月11日午後4時半、アーメダバード市在住のグジャラト印日協会会長のムケシュ・パテル氏が、協会事務局を訪れ、平林博理事長、菊地龍三事務局長(常務理事)、原佑二常務理事と面談し、来日の目的、グジャラト印日協会及びインドにおける親日友好団体の活動状況、将来の協力関係について、約30分話し合われました。

パテル氏は、18歳の学生時代に、グジャラト州立大学と大阪府茨木市の追手門学院大学との交換留学生として1972年10月から12月まで10週間日本に滞在し、その間ホームステイなども体験して、日本の文化や社会習慣などを学ばれました。帰国して2年後の1974年にグジャラト印日友好協会(Gujarat Indo-Japanese Friendship Association=GIJFA)を設立し、2007年2月K.C.パリック氏会長(グジャラト州立大学副学長)の逝去にともない、パテル氏が会長に就任されました。

これまで、GIJFAではパテル氏の指導と助言により、ムンバイ日本総領事館や国際交流基金、日印協会の協力を得て、日印親善と日本文化・社会・経済・産業の紹介のため、各種の展覧会、フィルム・フェスティバル、セミナーやワークショップ、各種使節団の受け入れや派遣を行ってきました。

パテル氏は平林理事長に対して、来年1月10日から13日にかけてパテル氏の地元アーメダバードで、JAPAN Festivalを行う予定で、既に同地を管轄するムンバイ日本総領事館とも連絡を取り合っており、その協力を得ながら実施する事になっているので、是非この機会に同地を訪れて頂きたいと、訪印を要請されました。

〈写真提供及び文責:鹿子木謙吉理事〉

*追手門学院大学は、1970年以来現在もグジャラト大学との交換留学制度を行っています。 <http://www.otemon.ac.jp/> 参照

(2) Ajantha-2008「アジャンタ絵画コンクール」表彰式開催

9月号でお知らせ致しましたアジャンタ絵画コンクールの表彰式が行われました。当日は、約200名の来場者があり、大盛況でした。

子供らしい可愛らしい作品から、年齢を見て驚くほどの大人びた作風まで、力作ぞろいです。同封の作品集を、是非ご覧下さい。

表紙は、各年齢別の1等賞受賞作品です。左上から順に、部門と受賞者名は、以下の通りです。

1. 8才 鈴木 里菜子	2. 16才 高橋 萌	3. 11才 Shrey Shanbhag
4. 15才 高橋 優実	5. 9才 Bharath Srinivas	6. 7才 吉識 瑠璃
7. 10才 佐東 萌花	8. 12才 Madhavi Karanji	9. 6才 Mauli Mehrotra

(3) チャロー！インディア：インド美術の新時代 開催中

森美術館(六本木ヒルズ森タワー 53階)で、11月22日(土)から来年の3月15日(日)まで、開催されています。詳細は同封のチラシをご覧ください。割引券も同封しておりますので、皆様お誘い合わせ上お出かけ下さい。

6. 掲示板

<国際児童図書評議会(International Board on Books for Young People)より緊急募金のお願い>

去る8月、インド・ビハール州を流れる大河コシ川が氾濫しました。被災地(Madhepura, Supaul, Saharsa, Purrua, Araia)では、小学校の3分の1にあたる約2,500校が浸水崩壊し、子どもの本も消失しました。IBBYインド支部にあたるAWIC(インド児童文学作家イラストレーター協会)では、被災地の使用言語であるヒンディー語のアルファベット絵本を5,000冊増刷し、小学校に配付する計画です。協会会員の鈴木千歳さんからご相談があり、紹介するものです。

AWIC/IBBY インド支部
事務局長 マノラマ・ジャファ
Tel/Fax ++91 11 23 31 10 95
Eメール vjafa@bol.net.in

このアルファベット絵本は「JBBY インド識字基金(1998-2001)」を元にインドで制作されたものです。この度の被災地支援にご協力いただける方は、下記口座にお振込み下さい。

郵便振替口座：00180-1-80781

口座名義：日本国際児童図書評議会 (IBBY の日本における窓口)

※通信欄に「インド洪水」と明記のこと

<次回の『月刊インド』の発送日>

2009年1月号の発送は、**1月16日(金)**を予定しております。インドに関係のある催事のチラシなどを会報に封入しませんか? 作業する方は、会員でなくても構いません。話しながらの和やかな雰囲気での作業です。同封のチラシをお読みの上、事務局までご連絡下さい。

<事務局 年末年始の休みについて>

日印協会事務局は、年末年始の12月27日(土)から1月4日(日)まで、休みます。お問い合わせ・ご連絡等は、休業期間を避けて下さいますよう、お願い申し上げます。

<編集後記>

ムンバイ同時多発テロのニュースには、衝撃を受けました。本来インドの治安は決して悪いものではありません。こういった事件は本当に残念です。早急な事件の全容解明が望まれます。

亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

今年も無事に本年の最終号を皆様のお手元に届けることができました。これも会員の皆様方の御協力・ご支援のお陰です。ありがとうございます。

皆様が良き新年を迎えられますよう、お祈り申し上げます。



日印親善のために会員の輪を広げましょう



法人会員・個人会員の入会をお待ちしております。

1903年、大隈重信、澁澤榮一等によって創設された財団法人日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。ここ数年来の日印の良好な関係がより一層深まるためにも、会員の獲得は重要な課題であると考えております。インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：個人 6,000円/口

学生 3,000円/口

一般法人会員 100,000円/口

維持法人会員 150,000円/口

☆入会金：個人 2,000円

学生 1,000円

法人 5,000円

(一般法人、維持法人会員共に)



財団法人 日 印 協 会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階

ホームページ：<http://www.japan-india.com/>

電話：03-5640-7604 Fax：03-5640-1576 E-mail：partner@japan-india.com